



十有余年で神戸の鈴木商店を世界的大商社に育成し、大正期を代表するビッグ・ビジネスに急成長させた。その経営手腕は、わが国企業経営史上の一大驚異であった。それは、世界最古の富豪「三井」が伊勢松坂で創業して以来三百年もかけて営々と築いてきたことを、名もない名野川べりの鼻垂小僧から身を起した、この丁稚あがりの鈴木の大番頭、金子直吉が、なんとわずか四半世紀たらずで達成したからである。

大正九年、直吉の右腕、西川文蔵支配人が急逝したことは、鈴木商店の運命にとって致命的であった。台銀による鈴木商店の整理が大詰めを迎えたとき、株式鈴木商店からの「直吉の退陣」が条件とされていた。直吉の辞意が表明されると社員大会は荒れ、直吉を中心に地縁で固めた「土佐派」は咆哮し、「学卒者近代派」に反撥した。高畑の岳父（高畑夫人千代子の実父）、二代目岩治郎は、それをのめば鈴木商店は救われるという土壇場に直面しても、直吉と鈴木商店の運命を共にする決断を敢えてした。そして、直吉の比類なき忠誠心に報いるために、母子二代にわたる「最も主家らしい主家」としての誇りと誠意に燃えたのであった。ここに、鈴木商店の華麗さと史上類例をみないはかなさがあった。（神戸大学教授、経済学博士）

## 鈴木商店を支えた人々

柳田義一

父・柳田富士松は、生前、金子ほどに世間に知られなかったが、父としては少しも名聞を求むることを欲しなかった。鈴木商店という共同体のために、一致して仲良く充分働けば最高の幸福である、というふうを考えていた大調和主義者でもあった。人間の体には頭があり、胸があり、手があり、足があつて、よく

え、万事自然である。又、五体もこの通りで首は上に位し、足は下に居る。前後別あり左右定まる。各々その持ち場を守って素直にして、少しも役不足や不平をこぼさず腹も立てない。調子づいても悲観も落たんもしない。常に静観のかまえて、刀折れ矢つくる迄男の自分を發揮したことが奥床しく思える。

父が鈴木のために尽瘁してきた経歴を見ると、金子に負けない忠誠を励み、草創の頃から金子は樟脳部を担当、利剣のように剛利決断を行つて事を処し、父は細心砂糖部をあずかり、その穩健着実の商法を生かした。世間では金子は計画し、西川は実行し、柳田はその收穫を最も堅実に取り入れる役で鈴木の大目付役というところ、信用第一主義を楯として活躍して来た。各銀行に多額の定期預金をしていたために銀行に対する信用は絶大であった。時に資金の必要を生じた場合は、定期預金を担保として使つたものである。

去る昭和二年四月二日、不幸幻の城と崩れ落ちたにもかかわらず、鈴木根性というか、爾来、各自各方面に離散して再建の意気で健闘を続けて来た。倒産後三十五年目には残党の武將達に依つて辰巳会を発足させた。而して四季折々には之らに依つて会合を催し、温故知新友情の世界を続けていることも奇蹟である。

どこの会社と言わず、社員同志が互に嫉視反目して上司に同僚の非行を訴えたり、或るいは流言讒口を用いて相排斥し、先輩の空腔を騒いだりするものがある事を耳にするが、鈴木には嘗てそういうものはなかった。又、末輩が益暮などに上役に物品を贈ることは比較的少なかった。夫れはよね刀自の訓化よらしきを得たからであろうが、父もまたこの点は十分意を用いた。而して自分自身頗る廉潔で、何ら道楽とてもなく君子然たる風格を備えて過ぎた。

思えば日清役の終わった頃、金子の思惑違いから樟脳のハタ売りに大失敗が起り、店内名状の出来ない大騒動がもちあがつ

調和した共同生活をしている。共同生活には、夫婦、親子、友達、職場、何れも人体に匹敵している。その機能の中の一方が欠けると馬鹿になる。慈悲が足らぬと残忍になる。勇気が過ぎると野蛮になる。而して頭が先に行つても駄目だし、足だけ先に行つてもいけない。からだ全体が一つになつて働かなければならない。丁度、山林の樹木が二本あつても三本あつても、互いに絡み合つて根を張り、風雨や地震に備え、枝が二本あると相互に枝の伸び方を譲つて、互いにしっかりと共同生活を営んでいるというのである。父と金子との取り組みも、丁度そのように旨くいって来た。父は円満な人で、常に撞球のようだと人から例えられたことがある。球は常に円満で八面玲瓏、どこが上とも尻とも分からぬ、唯々コロコロと転げ歩いて、而して一向に俺はこうだとしゃちほこばったり、自我がない。人が突いたままに働いて柔和善順である。それでも凡人の目には見えぬが、球は一定の規格や力学上の根拠によつて動いている。したがつて、よね刀自や金子が突いたればこそ、あんなに面白く回転したが、下手な撞手にかかつては決してあのように動かなかつたであろうと自分なりに考えている。

昔ある男が雪の朝、寝ていると下男が雨戸をガラガラと繰り返す、「旦那様、今朝はえらく雪が降つております」と言う。「そうかどれ位積つているか」と尋ねると、「厚さは五寸ばかりですが巾は知れません」といった笑い話がある。この巾の知れぬのが「カネタツ」鈴木であり、金子、柳田である。その巾がなんぼあるかと尺を取つて歩いたような野暮ったいことはない。鈴木には二代目鈴木岩治郎という立派な方が控えている。その上に、よねという不可侵の尼將軍が采配を振られる。金子、柳田らは陣中で総べてを多数の將兵に委して最善をつくしている。例えば、富士の山を高いままに眺めて、それをどうにもしない。自分は安住しているからだ。雲が掛かつたままに眺めて斯く斯くのもの悉く安住して、低い所が低く、高い所が高く聳

た事がある。この時よね刀自の賢明なる判断と寛大なる度量でこんなことで金子に暇を出しては店の損である、一途にそう思われた。どこまでも金子の手腕を信じたからである。父もまた金子を庇護し、商売は時の運です、損害は大きくとも命を賭ければ必ず取り戻せることです、もう一度金子に委せて骨を折らせて下さい、と同僚の非を口にせず、失敗を慰め一致協力、善処を誓いながらこんな事から、嚴肅の中に慈愛の溢れるよねの意図が、世界の鈴木へと発展させて参つたことと思われる。今回計らずも梅田コマ劇場の晴れの舞台「海鳴りやまの」が上演されることは、鈴木につながるものとして無上の光栄と感謝感激にたえません。また、地下の先人達も冥して余りあると信じて止みません。

## 海鳴りやまの

義一

哀別に暖簾の紺が濃ゆくなる  
海鳴りのポスター吊られ春の虹  
商魂の袋の水は溶け易し  
法師蟬鳴けば汽笛が追いつかず  
海鳴りて夕焼雲をつのらせる  
丘の上人耳立てる雉の声